

看護に生きる ——臨床と教育の中から——

弘前大学 木村宏子

このたび図らずも大先輩が立派に務めを果たされました会長講演を私がさせて頂くことになりました。会長とは名ばかりで、内容の伴わない私には、諸先輩のような学術的な講演は無理のようです。そこで今回は、一人の女の子が看護とは何かも分らず看護の世界に飛び込み素晴らしい先輩や看護教師に出会い看護の魅力に取りつかれ、看護発展の礎石になりたいと願っている話をさせて頂きます。

私が医療の一端で仕事をするようになりまして、かれこれ35年過ぎました。その間、私の職種も何度かかわりました。一番最初は、僻地を抱えた2町2か村立の町立病院の看護助手です。この5年間に私は、医療における看護の重要性を確認しました。

正しい知識と正確な技術を身に付けたい。そう考えた私は、他の人達より遅れて看護学校に入りました。

昭和36年、吉田時子先生（現聖クリストファー学長で本学会理事）が教務主任をされていました弘前大学医学部附属看護学校（現医療技術短期大学部）に入学しました。この3年間は、看護助手の経験を持つ私にとって『看護とは何か』を改めて学ぶ機会となりました。看護学校卒業と同時に私は、再び無医村の中心にある前述の病院に戻りました。

新しい知識と技術で僻地の医療改善にと希望に胸を膨らませて帰ったのですが…。

私が目にしました町村医療の実態は、惨憺たるものでした。地域の交通事情は悪く、雪が降れば陸の孤島となる村落には、医師も助産婦もいません。出血多量で家族の目前で死亡する妊産婦。馬小屋の天井で分娩し、わらの中で死亡する新生児。火事になっても子供達より馬が大切と『子供を死

なせても馬を守って』大火傷で入院してきた出稼ぎの夫をもつ妻。大腸炎の幼な児を背おって、病院まで5時間、気が狂ったように歩き続けた母親とその背中の冷たい幼な児の顔。トラホームの家族8人にタオルが一本。働き過ぎで重症妊娠中毒症で子癇を併発して死亡する母親。

クレゾールの原液で外陰部を消毒する無免許の産婆等々、大学では目にすることができないようなことばかりでした。

これが当時の地域医療の実態でした。

このようなことが起こらないようにとどんなにがんばっても医師も看護婦も助産婦も不足なのです。このような実態の中で仕事をしているうちに、私は悲しみと同時に憤りを覚えました。

医療の行き渡らない地域にこそ、より専門的で有能な看護婦や助産婦の定住が絶対に必要と考えました。僻地にこそ有能な看護職が派遣されるべきであり、またそのような看護教育がなされなければならないと考えました。その後、弘前大学病院に戻り、外科病棟で3年間働いた私は、長年、胸の中で暖めていた母子保健の理念と技術を学ぶために助産婦学校に進学しました。その時は、もう30歳で満1歳の子供がおりました。

しかし、好きな道を歩むのに年齢など何で厭う必要がありません。

学校長であった品川信良先生・教務主任の工藤ツル先生のご指導を得て、卒業後、現在の看護学科教室に勤務しましたのが昭和45年でございます。あれから22年、実践活動と教育の出来る人間性豊かな看護職の養成をしたいと願って、微力ながら努力をしています。

教育と研究の発展、そして臨床における看護の質の向上、この願いは、私の願いであると同時に全ての人々の願いであると信じています。